慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 中世ヨーロッパにおけるダンス・ソング : Carolについて |
| Sub Title | Dance in the middle ages : carols |
| Author | 本間, 周子(Honma, Shuko) |
| Publisher | 慶應義塾大学体育研究所 |
| Publication year | 1976 |
| Jtitle | 体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.16, No.1 (1976. 12) ,p.29- 39 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00160001-0029 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 中世ヨーロッパにおけるダンス・ソング
## — Carol について —

本　間　周　子*

## は　じ　め

中世のヨーロッパはキリスト教の時代であり，信仰にもとづく思想が生活を支配していたと考えられる。しかし，当時を注意深く調査すれば，宗教が支配的であった社会のなかにも，世俗的な，また，庶民的な楽しみの数々があったことがうかがわれる。教会関係者が，庶民たちの楽しみや娯楽に対して，厳格な戒律的な立場から，説教などで非難攻撃を加えたことは，立場をかえていえば，世俗的な，現世的な人間肯定の主張が根強く生きていた証拠となっているということができよう。(1)

このような視点からここでは，時期を中世後期にしぼり，ヨーロッパにおける dance-song の一つとして，イギリスのあらゆる社会階層のあいだにきわめて人気のあった Carol に関して調査し，考察を試みることとする。

## 本　　論

Carolという語は，大体12世紀ころより，フランスにおいて使われており (Carole)，さらにその起源をたどれば，かなり古い時代における豊穣の信仰にまで遡るものと考えられる。

Gloria in excelsis Deo と呼ばれる有名な聖歌が最初の Carol であるという説もある。(2)

Julian の *A Dictionary of Hymnology* (1892年) によれば，「元来ダンスを伴ったよろこびの歌である」と述べている。更に，このダンスは拍子に特徴があるとされ，聖なるものに対するだけでなく，歌われる目的によって，伴奏を伴った，世俗的な抒情的内容をもったものもあったといわれている。(3)

*Oxford English Dictionary* によると，"Carol" は Ring dance であると定義され，これ

* 慶應義塾大学体育研究所助教授

に関連して次のように大要分類されている。

1. 歌を伴う Ring dance であり，大勢の男女が手をとり合って輪をなし，ダンスのステップで回るおどり。
2. 歌そのものをさしており，元来はその歌に合わせて踊ったもの。
3. a 宗教的なよろこびを持った歌，または聖歌。

   b 特に主の生誕を祝ってクリスマスに歌われるよろこびの歌。

*Middle English Dictionary* によれば，次のように説明されている。

中世英語 Carole は古代フランス語からきているものとされており，次のように大別される。

a. 歌を伴う一種の Round dance であり，一群の人々が輪をなして踊りうたうものである。文献上最も古い例は，1300年～1325年頃の *Gloucester's Chronicle A*, 1218 に出てくる。

b. Carol を踊る人たちが用いた歌。

c. 宗教的な詩，または聖歌。

次に中世の人々に大変親しまれて踊られていたこの Carol を，ダンスの形式の面から調べた特徴を列挙すると，

1) 男性と女性の踊り手が円になって手をつなぎ，歌声や楽器に合せて踊るものである。人数はとくにきまっておらず，女性だけの場合もある。

2) 踊り手はソロで歌うリーダーと，その他のコーラス役から成る。

3) リーダーは踊り手の一人であり，ダンスはリーダーの指示によって進行する。

4) 踊りは大体スリー・ステップの拍子で行われ，踊りのあいまに足ぶみを行う。

5) 踊り手は手をつないでいるが，しばしばゼスチャーが入る。

6) リーダーはスタンザ (Stanza) の抒情詩を歌い，その歌が終ったとき，残る全員がリフレインを踊りながら歌って応ずる。

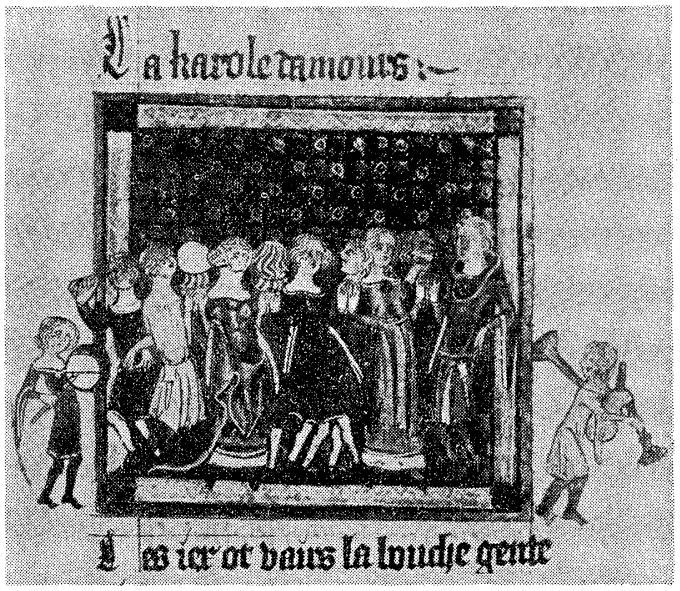
7) 歌は四音節の脚韻 (Rhyme) をふんだ，四行連をつらねたもので，スタンザの最後の行がリフレインとなる。

基本的な詩行をパターンとしてあらわせば次のようになる。

$$\left( \begin{array}{ccc} \text{Stanza} & & \text{Stanza} \\ \widehat{a^4\,a^4\,a^4}\ \underline{\times} & \text{or} & \widehat{a^4\,a^4\,a^4}\ \underline{\times\times} \\ \text{refrain} & & \text{refrain} \end{array} \right)$$

8) リフレインの始まりには，言葉や楽器による合図が行われるのが通常である。(4)

となる。




第1図　A Medieval Carole, From British Museum MS. Royal 20. A. xvii.

Carol は当時の貴族，庶民等の階級にとらわれず，多くの人々に親しまれていたものであるが，次に文学作品の中で，どのように Carol にふれているか，実例にあたってみることにする。

はじめは，庶民の間で親しまれた Carol について触れたものである。

William of Waddington の *Le Manuel des péchés* を訳した *Handlyng Synne* は，訳者である Robert Mannyng of Brunne の意見も加えられて，事実と伝説がまざった物語集となっている。その内容は，神聖なるものへの冒とく的な罪について数多くの実例を挙げて攻撃している。その中には教会の広場で Carol に熱中する人々に加えられた神の呪いを語った有名な物語がある。

これは北ドイツ Kölbigk で1021年に起きた有名な出来事で，後にイギリスに伝えられたものである。イギリスで *Handlyng Synne* が書かれたのは14世紀前半であるが，この事件は11世紀前半のことであり，聖職者によって書かれたものであるが，庶民の間で好まれて踊られた Carol の様相がうかがわれる。その内容を簡単に述べる。(5)

この頃，教会の中および churchyard で，レスリングや Carol を踊ることはうるさく禁止されていたのに，クリスマスの夜12人の愚かな若者たちが，司祭の娘 Ava を誘いだし，ミサにも出ないで教会前の広場で Carol を踊ることに熱中し，司祭の再々の説得にもかかわらず一向に踊りを止めようとせず，彼等の歌声は教会内のクリスマスの礼拝の音楽を打ち消すほど賑やかであった。そのため，この踊っている人たちに翌年のクリスマスまで，12カ月間踊りつづけるように呪いがかけられ，彼らは手をつないだまま輪をきることもできず，夜昼となく踊り

第2図　A Mediaeval Chain Dance or Carole, showing Animal-Men and a May-Bush.

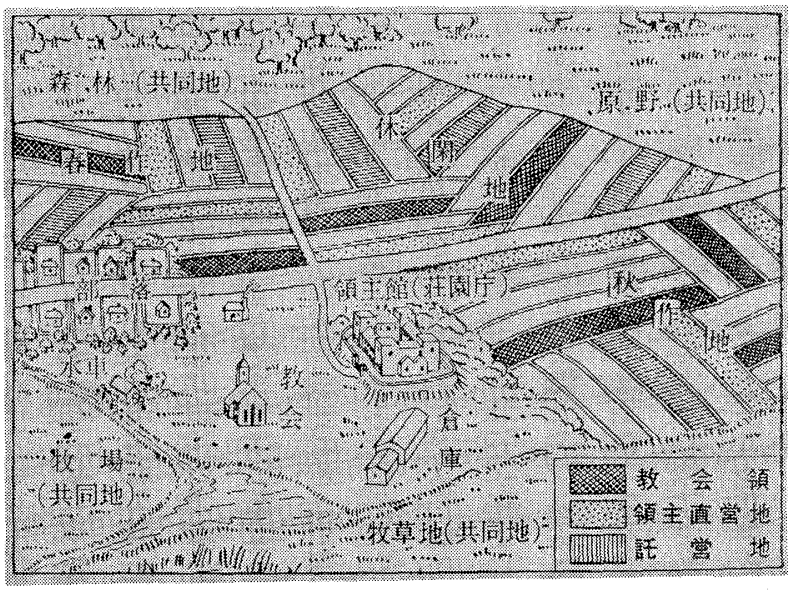
第3図　A Carole. From a Manuscript of the *Romance of the Rose.* (British Museum, MS. Harley 4425).

つづけることになったというものである。

これにより庶民たちの間で，熱狂的に楽しんで踊られているCarolの状況を推察することができる。

次に上流階級でのCarolの流行ぶりを知る材料として，14世紀後半の作品『ガーウエイン卿と緑の騎士』(*Sir Gawain and the Green Knight*) がある。北西，中部イングランド (Northwest Midland) で書かれたこの頭韻詩の物語は，中世で最も有名なアーサー王伝説の一挿話を扱ったロマンスである。宮廷社会が物語の背景になっているが，この中でアーサー王のキャメロット城内で，クリスマスと新年を祝う宴会が開かれ，夕食のとき貴族の男女がCarolを楽しげに歌い踊るさまや，また聖ヨハネの祝日にワインを飲んでCarolを踊る情況が生き生きと描写されている。(6)

あるいはまた，チョーサー (1343—1400) が一部訳したものとされている，13世紀フ




**第4図**　緑で囲まれた教会・荘園の一例

ランスの有名な宮廷愛の物語詩『ばら物語』(*Roman de la Rose*)も Carol についてふれている。(7)

当時の教会は第4図によってもうかがい知ることができるように，教会前には広場，町や村の中には広々とした緑地があり，人々は身分のいかんを問わず庭園や果樹園の草地の上や，広場や，牧草地などで，数々の楽しみを味わったのである。それらの楽しみの中で，特に人気があったのが Carol であった。この Carol は春か夏，またクリスマスの頃に好んで行われたようである。とくに14世紀以来イギリス人はこのダンスに熱狂的であり，技術的にも優れていたと P. Dronke は『中世抒情詩』(*The Medieval Lyric*, 1968) の中で述べている。

この踊りの様子を13世紀ドイツの詩歌集『カルミナ・ブラーナ』(*Carmina Burana*)がラテン語やドイツ語を使ってうたっており，Carol を踊るとき，どのような歌を歌いながら踊ったのか，ある程度は推察できる。(8)

中世ドイツ語の歌の例としては次のものがみられる。

ここで輪を作っているのはだれ
みんな娘たちばかり
夏中踊ってすごしたい
一人の男も入れないで

ラテン語の例としては次のものがある。

バイオリン弾きのまわりを踊ろう
調子を合わせ，共に楽しみながら
音楽のよろこびを分ち合い
拍子をとり，メロデーに合わせて手を打ちながら(9)

以上のように歌い踊るさまが述べられている。ここでは伴奏楽器としてバイオリンが出てくるが，当時の資料からみると，太鼓，ラッパなども使われていたことが理解される。

次に Carol に関する最も重要な文献といわれている L. Greene 編の『中世イングランドのキャロル』(*The Early English Carols*, 1935) から実例をひいて説明する。

次例は，15世紀ごろ創作された世俗的な歌で，"So well me gone" ではじまる446番の歌である。

そうして良い時が過ぎてしまったら
トロリー・ローリー
そうして良い時が行ってしまったら
トロリー・ローリー

1. まず従者になりたいな
トロリー・ローリー
だって彼らは優雅な姿のいきな方
トロリー・ローリー

2. 食べもの　飲みもの　着るものなんか
トロリー・ローリー
誓ってそんなの一つも欲しくはない
トロリー・ローリー

3. 彼のボンネットはまっ赤っか
トロリー・ローリー
まっ黒な毛がついている
トロリー・ローリー

4. 彼のダブレットはきれいな絹じゅすづくり
トロリー・ローリー
彼のシャツは特製，こぎれいで
トロリー・ローリー

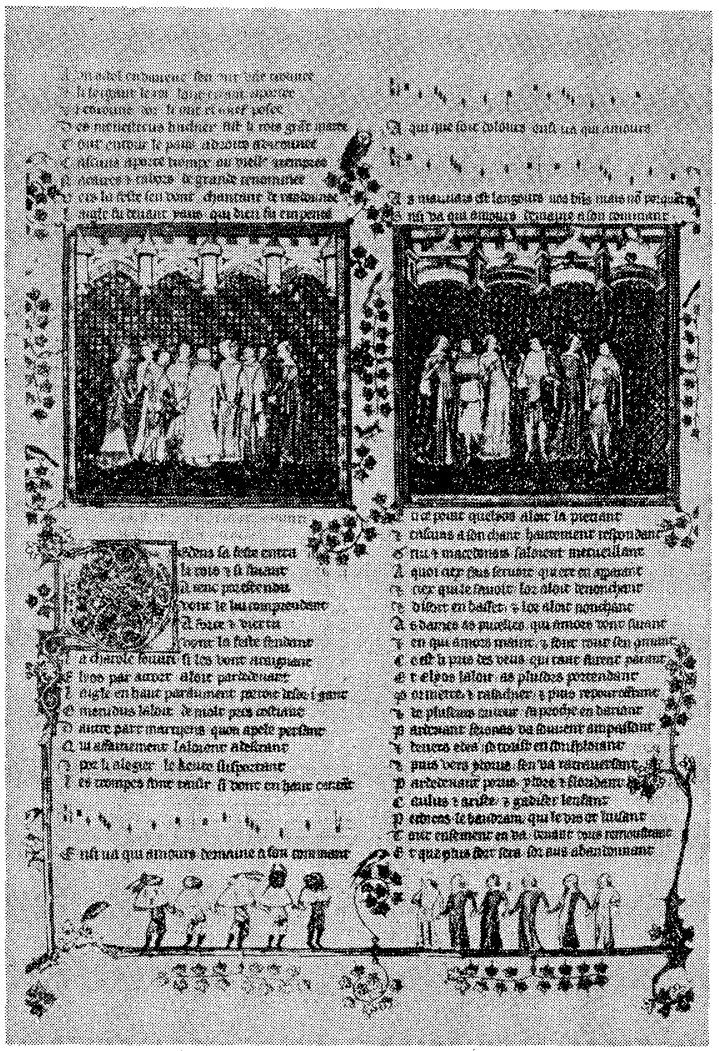
5. 彼の外套はこぎれいでふんわりまるい
トロリー・ローリー
彼の接吻は100ポンドの値うちもの
トロリー・ローリー

6. 彼の長ズボンはロンドン製の黒色
トロリー・ローリー
彼のスタイル完璧そのもの
トロリー・ローリー

7. 彼の顔はほんとに男らしい
トロリー・ローリー
だからみんながほれるのさ
トロリー・ローリー
(10)

最初の一連およびこの“トロリー・ローリー”の部分がリフレインであり，リーダーのソロの恋の歌に答えてその他の踊り手がコーラスする部分である。

“トロリー・ローリー”のこの言葉は，当時の文学作品にもよく引用されていて，このことでも大変ポピュラーであったことがわかり，中世の庶民の人たちの生活の一部として，このダンス・ソングが今の若い人たちが流行歌を気軽に口ずさむのと同じように使われていたものであり，若い人たちの身近な関心事が，ラブ・ソングとしてCarolの中にとらえられていることがわかるのである。



**第5図** A Revel; Dancing (left) and singing (right). A page from the *Alexander Romance*, A Manuscript of about 1340 in the Bodleian Library, Oxford

Carol は世俗的ないろいろの主題を歌っているが，一方，宗教的な題材をうたった例としては，キリスト生誕，つまりクリスマスの祝いの歌がある。

Greene 編の5番（15世紀作）の "Go day, go day" という歌がある。これは二重唱（2 Voices）で歌われたものである。

よき日だ，よき日だ
よき日，わが主クリスマス卿よ！

① よき日だ，われらが王クリスマス卿，
老いも若きも　みんなが　こぞって
あなたの　来られるのを喜んでいるのだから，
よき日だ！

② 力強き神の御子が
天から地上に降りてきて，
美しい娘から生れ給うたのだ
よき日だ！

③ 天も地も地獄も
そこに住むものみんな
あなたのおいでを待ち望んでいたのだ
よき日だ！

④ 学僧たちはあなたのおいでを知っていた
あなたは人間を救うため
人間の苦しみを解き放つため来られた
よき日だ！

⑤ いろいろな事をして陽気に騒ごう
心のゆくまで楽しもう
わがうるわしの主よ，あなたのために
よき日だ！

最初の「よき日だ！」の二行をリフレインとして，このようにキリスト生誕を素朴に喜び，それを祝って陽気に楽しもうとする気持を歌っている。

中世ヨーロッパでは，一般的にキリスト教の身体観，あるいは舞踊観が人々の生活に大きく影響していたことは事実である。教会当局は，現世における肉体の蔑視の立場に立ち，いきおい舞踊が人間の堕落をもたらすものとの考えが強かった。

1497年修道士ローレンス・ウエイド（Laurence Wade）の書いたものの中で "Carol" を罪の意味をもった言葉として使っている。(12)

しかし中世初期にはダンス・ソングも，宗教的な儀式の中で礼拝のとき使われていたことをGreene や，P. Dronke は記述している。Greeneによれば，メロビング王朝（5～8世紀）から14世紀まで，祝祭のとき聖職者は典礼のメロデーに合せて踊ったと述べた資料がある。(13) さらにDronke は，教会やその境内は市民や村人の生活の中心であり，教会自体が夕方の余興の場所となり，天気の悪い時にはダンス・ホールとなり，ここでダンス・ソングが行われたと述べている。(14)

Carol が教会等において踊られたことは，世俗的な民衆の歌や踊りの習慣を，庶民をキリスト教に同化させるための手段としてとりあげたものと考えられる。

しかし6世紀ごろから中世末期まで，しばしば出された舞踊・音楽禁止令は，教会側の意向とは反対に，いかに庶民たちの間でこのようなダンス・ソングが根強く盛んであったかを証明するものでもあろう。例えば8世紀のプリミニウス大修道院長は *Dicta Abbatis Priminii* のなかで次のように舞踊を非難攻撃している。

「ダンスのいかがわしく放とう的な歌，あるいは悪魔の矢をさけなさい。教会の中でも貴方たちの家でも，街頭やその他の場所でも，このようなことはしないように。それは異教徒たちの習慣が残っているからである。」(15)

と述べている。中世において舞踊を攻撃する形容詞として，「みだらな，いかがわしい，放いつな，下品な，卑わいな，悪魔のような」(16) など，批難の言葉がひんぱんに使われ，舞踊することにより異教徒の習慣が残ったり，みだらな身ぶりは神を冒とくして，神聖な場所で人々が踊る習慣をもつようになることへの規制から，教会側は歌や踊りは宗教的な罪であり，神によって地上で罪せられなければならないとしたのである。

Carol は当初はダンス・ソングの意であったが，15世紀に入ると歌と踊りに分離して，「歌」としてのCarol が残ってゆくのである。その例として，15世紀の有名な詩人ジョン・オードリー（John Audelay, fl. 1426）の書いた Carol の見出しに「みなさんがた，クリスマスにこのCarol を歌って下さい」，あるいは「どうぞみなさん，敬ってこのキャロルを読んで下さい」(17) とある。

これらのことから類推すると，当時Dance song であったCarol は歌と踊りが一体的な関係にあったものであるが，教会では，ゆきすぎた若者たちの戸外での自由な楽しみである Carol を踊ることは不道徳なことであり，神を冒とくするものであるとの意向がだんだん強くなり，また信仰心の厚い人たちのなかには，悪魔が自ら踊りをリードしていると信じている人もあった。このような情況のなかでCarol における歌と踊りの分化が行われてきたことが推定されるのである。今日のクリスマスの聖歌としてのCarol はこのような宗教的なかかわりを歴史的にもちながら，庶民の中に根強く生き続けてきたものといえよう。

## む　す　び

以上のことから Carol の性格についてまとめると，

中世において，

1) Carol は貴族・庶民の階層をとわず盛んに踊られた代表的なダンス・ソングである。

2) 春や夏，とくにクリスマスの頃，教会や町の広場・緑地で，大勢の男女が手をつなぎ歌を歌いながら踊るリング・ダンスである。

3) Carol はそこで歌われる内容よりも，スタンザの形式，ダンスメジャーによって特徴づけられている。

4) ヨーロッパで古くから歌い踊られ，その起源は異教の春と冬の祭りの民族のダンスからきており，豊穣の信仰にまで遡るものであろう。

5) 文献にはじめてあらわれるのは12世紀フランスであるが，フランスを通してイギリスにも伝わり，その詩は約500篇ほど現存している。

6) 15世紀になって宗教的，社会的理由により Carol は踊りを伴わない song となり，クリスマスとの関係が深まり Christmas Carol となるのである。

以上によっても明らかなように，ストイックな中世のキリスト教支配の中にあって，ヨーロッパ各地域においてあらゆる階層の人々が，死後の世界への憧憬をもつ反面，Carol に代表される舞踊の発展に見られるように，現世肯定的な力強い生命の讃歌を現実に見出すことができるのである。しかしながら，中世初頭において，教会において庶民的な舞踊が認められながらも，その後，それがみだらであり神を冒とくするとの理由で禁止され，歌と舞踊の分化が促進され，今日のような歌としてのクリスマスキャロルに至った経過には，中世のキリスト教の影響が強かったことを見逃すことができない。そしてまた，中世の宗教的支配の中で庶民のたくましい息吹きが Carol を存続させたことも否めない事実であると推定するのである。

注 (1) トレヴェリアン（大野真弓監訳）「イギリス史 I」みすず書房，1973. ホイジンガ（堀越孝一訳）「中世の秋」世界の名著，中央公論社，昭和42年。

(2) R. L. Greene, *The Early English Carols,* Oxford, 1935, p. xiii.

(3) *ibid.,* p. xiii.

(4) *ibid.,* pp. xxxv—xxxvi.

(5) K. Sisam, *The Fourteenth Century Verse and Prose,* Oxford, 1921, pp.

(6) *Sir Gawain and the Green Knight* (ed. Norman Davis, Oxford, 1968) ll. 42—43, ll. 471—3, 1025—6, ll. 1654—56, ll. 1885—86.

(7) *The Complete Works of Geoffrey Chaucer* (ed. F. N. Robinson, Boston, 1933), ll. 743—62.

(8) Peter Dronke, *The Medieval Lyric* (Hutchinson University Library, London, 1968), p.

189.

(9) *ibid.*, p. 189.

(10) Greene. *op. cit.*, pp. 303—304.

(11) Greene, *op., cit.*, p. 5.

(12) Greene, *op., cit.*, p. cxvi.

(13) Greene, *op., cit.*, pp. lx—cx and pp. cxi—cxxxii.

(14) Dronke, *op., cit.*, pp. 188—92.

(15) Greene, *op., cit.*, p. cxii.

(16) Greene, *op., cit.*, p. cxvi.

(17) *Middle English Dictionary*, "carol".

## 参 考 文 献

(1) Richard Leighton Greene, *Early English Carols*, Oxford, 1935

(2) Peter Dronke, *The Medieval Lyric*, Hutchinson University Library, 1968

(3) *Handlyng Synne* (K. Sisam (ed.), *op. cit*, pp. 4—12)

(4) *Sir Gawain and the Green Knight* (N. Davis (ed.), *op. cit.*)

(5) Cecil J. Sharp and A. P. Oppé, *The Dance : An Historical Survey of Dancing in Europe*, London, 1924

(6) 前川貞次郎「世界史」数研出版，1967。

(7) ジュヌヴィエーヴ・ドークール（大島誠訳）「中世ヨーロッパの生活」白水社，1975。

(8) エルヴェ・ルソー（中島公子訳）「キリスト教思想」白水社，1975。

(9) トレヴェリアン（大野真弓監訳）「イギリス史Ⅰ」みすず書房，1973。

(10) ホイジンガ（堀越孝一訳）「中世の秋」世界の名著，中央公論社，昭和42年。